

しろがねの猫

橋本 鶏二

若いころの句で、△枯芦にしろがねの猫うづくまる△というのが私にある。しろがねの猫などと表現できたことが嬉しく感じられたし、実際にそのころはまだ町中には芦薺が辻々にあった時代だから、そんな背景も自解のなかであってなんとなく私をいい心持ちにさせていた。思い出すとたしか糞虫庵の前の坂の小道で見た日ざしにぬくもって眠っていた白い猫であった。

その後幾年か経って、蕪村の句集を読んでいるうちに、△ぼうたんやしろがねの猫こがねの蝶△の作のあるのを知った。しろがねの猫と感じたことをよるこんでいた私は、蕪村のおなじ表現がすでに存在していたことがわかった。しろがねの猫を珠のように愛撫していた感情が萎えて、猫が冷却してゆくのを意識した。

蕪村の作は日光東照宮の左甚五郎の彫刻の睡り猫を詠んだ句らしくて、その構図の猫は牡丹花の下で睡っているらしい。私はその彫刻を今もなお見たことはないし、銀色に装われているのかどうかとも知らない。蝶も金色に牡丹の上に舞っているのである。牡丹も赤く猫も蝶もそういう風の彩色がほどこされているとすれば、しろがねもこがねも実写としての色彩へのなぞりがなされているにすぎない。

るさまは懐しく何か情の沁み入るものと思わせた。餅が一つ大きく膨れたのを、私は食べた。故郷の地に立った感はそのとき極まりのさまを心に満たした。

△旧山河餅焚く火に餅膨れ△という句を私はそのとき作って、心の中でははれと充実した。

私は草田男の作の、「……城の石崖裾濃なる」や、「……根元に遠き春の雲」などの言葉を、心の中に喫していた。それは清らかな水音と情の奏でるさまにそのときの心に沁み込んだ。もとより「夕桜」も「土手の木」もないが、情緒として今はそれ以上のたよりにする言葉はない。詩として援用の具にするのではなく、言葉として私は情趣の援用をこの接続された後は分断しても、効果のある言葉に絶った。「旧山河」という発現は意外なほど自然であった。

そういう内側の精神的な繋縛にかかわらず「旧山河」の生成は素直であった。草田男作品を仔細に見れば「旧山河」の文字を使用した作品もあるかもしれないが、草田男作品に限らず誰の作品にでも「旧山河」の文字があっても、私はいささかもたじろがない感じはこの句を信じている。草田男の詩精神が微粒子になって私の身ぬちに沁みとおった「旧山河」であり、飾焚く火に膨れた餅は正に私の現身の歓喜をのべたものとなった。

しかし、他者の作品と結ぶ連繋的な感情の発展がいくら自然な奔騰だとしても、誰もそれを堰きとめることができないだけに、それを制御し得るのは作者だけであり、作者の責任は大きい。

秀れた句集をひらき、高い境地の作に心打たれながら、自分の句のことを思っているとつい魂が向こうから乗り移ってきて、思いが

いと一応は言えるのである。だが、「しろがねの猫」という表現のあるかぎり蕪村の表現所在は明瞭で後代のものがそれをもちいることはつしむべきであることに間違いはない。

芸術的な位相がその転用によって部分的にはたとえ高度になされていようと、そのゆえに転用をゆるされる理由にはならない。蕪村の作の、「しろがねの猫」が潜在的に私の脳裡にあって、その発現がたまたま枯芦の叢樹にいる道端の猫を見た瞬間によりがえって、無意識の表現になったのか、あるいは偶然の暗合であるのか、私のいささかの自信から言えば偶然性がたかく、しろがねという言葉はその時分の若い世代の文芸好きの仲間には日常の話し合いの常識語としてあったはずだから、蕪村に対して非礼の罪はあるが、許してもらえなことだと考えている。だが詩語としての「しろがねの猫」はあくまでも蕪村のものであり、その二重の使用は許されないことなので、その句の掲載されている私の第一句集『年輪』を何らかの形で再び活字にするおりにはその中からとりのぞくつもりである。

一つの素因となる感情が極点に達したとき、それに形象を与えることのために、内部の体験からひきだしてさまざまの言葉をさぐる。

ついでこの間、一月十五日、今もほとんど農家ばかりの旧小田村、そのの庵校と地続きの平井神社の境内で、飾焚く火に私は立っていた。火守をしていたのは計らずも古い三人の友達であった。三人は分かるか分かるかともいってその老顔を私にさし向けた。顔の奥には遠い六〇年の昔の子供の顔のこっていた。飾の燃える火に近く伊賀の山が流れ川が流れていた。火の上には鉄蓋が置かれて幾つかの白い餅が並んでいた。破魔矢が焼かれ裏白がちぢれて焦げ

けない句の生まれることがある。良い作者の佳句にはつよい誘発力があるから、秀れた句の霊力で思いもしなかった自分を引き出してくるのである。当代著名な著者の句集が多く読まれるのも、その魅力の一つに誘発力のつよいことも含まれるかもしれない。

長谷川素逝が在世中吟行に出たときなど、参会者の句が皆素逝の句のようだったこともあり、素逝が苦笑いをしていただの思い出す。今はもうそんなことをする者もないが、単語集のようなカードを作って上五・中七・結句の言葉の種々を一々書いて、それをつなぎ合わせて句を製造していた不心得者もいた。

佳句を作れるようになるためには佳い心にならなければならぬ。見る眼を鍛えて心をゆたかにして自分の言葉や表現を発見することである。それが俳句を作る人なのだ。

清水基吉先生が直接指導する俳句添削教室

俳句上達のキメ手は、よい先生に直接添削指導していただくことです。

本教室は、清水基吉先生が、あなたの句を、直接添削指導する通信教室です。

●詳しい案内書無料送呈、ご希望の方はハガキで電話で下記へ

清水基吉先生の著書

俳句の鑑賞と作り方 B6・八五〇円
俳句を始める人のためにB6・八〇〇円

池田書店俳句添削教室俳句係
〒162 東京都新宿区弁天町43
電話・03-267-6320